

奨励研究 研究報告書

研究課題

近世前期における「茶花」と「抛入花」―その共通点と差異

京都大学大学院文学研究科非常勤講師

井上 治

「茶花」と「抛入花」はともに「立花」に対置されるといふ点で近い関係にある。同時にその境界は曖昧であり、固定的な規定で片付けられるのは難しい。本報告では、花の形の流れの中で「茶花」と「抛入花」がどのような関係性を以て展開したのかを動的に把握することを試みた。

第一章 「抛入花」の流れ

本章ではまず「抛入花」の流れを検討する。そもそも「なげいれ」という言葉は極めて広範かつ曖昧である。従ってこの花は時代と特質に応じて、中世の「なげ入花」、近世の「抛入花」、そして近代の「投入花」と書き分け、総称として「なげいれ」と表記されることもある。本稿でも議論を明確にする為、差し詰め議論に関連する中世の「なげいれ」を「なげ入花」、近世の「なげいれ」を「抛入花」と表記する。

『仙伝抄』（文安二年奥書）には、「なげ入れはなといふは、舟などにいけたるはなの事なり」とある。『なげ入花』は、まず舟花器に生ける花を指していた。尤も、『花秘伝』（天文一二年奥書）に「柱花瓶の花の事、きし「岸」をまなふ事もあり。又なげ入花といふ事もあり」と言うように、「なげ入花」は舟花器に限るものではない。元来「なげる」とは『仙伝抄』に「うちよりそとへなけて」あるいは「しんのうしろへ草なけたるがよきなり」と言うように、ある方向に曲げ流す事を言う。これは当時の正格の花であった「立花」において「しん」の枝を直立させたのとは異なる方法であった。また池坊専栄による『池之坊古伝法巻』（天文一四年奥書）には、「生花の事、影ナトニオオヒ出タル様ニ生ル也。又ハ舟ヲツルヤウ、掛絵ニツヒスルトクニ釣スヘシ」とある。この「生花」は「なげ入花」とほぼ同義、あるいはそれを包摂するものと考えていいだろう。同じく専栄の『花伝抄』（永禄一〇年奥書）にも「生花の事、さたまりたる枝葉もなし……出生の姿肝要也」とある。「さたまりたる枝葉もなし」とは、「立花」と比較してのことである。そして、「出生の姿」すなわち自然の生付を生かす事が肝要であると述べられている。このように室町期の「なげ入花」とは、釣花器、掛花器、あるいは柵の花器などに生けられた自然志向の花であり、それはしばしば「生花」とも呼ばれた。

次に比較の為、江戸時代中後期の「抛入花」について見てみる。『諸花抛入百瓶図』（元禄九年奥書）には「抛入は立花を表したる物也といへども、花を立るの法を守りて作意第一たるへし。大方の法度は免侍れども格式のなきは花形も宜からず」とあり、『桐覆花談』（享保一四年序）には「抛入のときは流し葉留の二格有。……いけ花は立枝押枝添枝流葉留花の五つの法有」と言う。ここで注目されるのは、まず「抛入花」が「さたまりたる枝葉」、つまり役枝を持つていることである。『桐覆花談』では具体的に「流し葉」、「留」という役枝を挙げている。また同書では、さらに多い五つの役枝を持つ花を「生花（いけはな）」とし、「五景花」という字を充てている。この「抛入花」と「生花」の区別は『抛入岸之波』（元文五年刊行）でも明確に為されており、同書では「生花」を「書院、大床の花」、「抛入」を「小座敷、囲の花」としている。この区分は池坊系の『生花正意四季之友』（寛延二年序）において明確な価値観を伴って現れる。すなわち同書では「投入といふ名目は生花にかつてなき事也。世に生花をなげいれといふことは甚無礼なる言葉也」と述べ、「抛入」を「やりはなしの所作」として批判し、「生花」こそ床飾りに相応しい花であるという。

「なげ入花」と「抛入花」に共通するのは、「立花」との対立的関係である。もともと「立花」は依代に起源を持ち供華とも融合しつつ三具足の花として様式を定めたもので、その花態は「しん」の枝を直立させ周りに「下草」を配するものであった。近世以降、『抛入花伝書』（貞享元年刊行）に「なげ入花といふ事、いつ頃り初まり侍るや。答云、もと立花を略したる物也」と言い、『抛入岸之波』に「凡抛入花といふ事、此の国花を挿愛するもにして、立花も此抛入より出たるものなり」

「本稿では「たて花」、「立華」系統の花を「立花」と総称する。

「尤も室町・江戸期においても「投入」という表記は用いられ、また近代以降も「抛入」という言葉は生きている。

「ただし『仙伝抄』に関しては現存するものが江戸時代初頭の版本のみであるので、必ずしもその内容が奥書の年代のものであるという確証はない。

と言うように、両者の正統性を巡る争いは絶えなかったが、いずれにせよ造形的な「立花」と自然志向の「なげいれ」の相互作用によって花道の思想は発展してきたと言える。室町末期から江戸前期の「なげ入花」から「抛入花」への移行において、この花態は自然を重視しつつも（あるいは自然を表現する為に）役枝が定められつつあった。そして室町期において「なげ入花」とほぼ同義に用いられていた「生花」は、より格式の高い花として規定されていく。これらの変化の一要因となったのが「茶花」の存在であった。

第二章 「茶花」の流れ

「茶花」の理念として先ず挙げられるのは、侘び茶の祖珠光の「花の事、座敷のよきほとにかろかるとあるへし」（『お尋の事』）という「茶花」観であろう。この言葉は「茶花」の理想として、『分類草木人木』（永禄七年）等にも受け継がれてゆく。珠光以降、茶室の変化に伴って「茶花」もより草体化したが、そのひとつの極致が利休であることは言うまでもない。「小座敷の花ハ、かならず一色を一枝か二枝かろくいけたるがよし」（『南方録』）という利休のものとされる言葉は、その理念を余す所なく伝えている。利休の後、「トカク花ハ織部ニハ不及トコロアリ。籠ノ花生ニ牡丹ヲ五輪マデ入ラル」（『槐記』）ともあるように、織部、あるいは遠州の花は茶室の変化とも相俟って比較的華麗な花であった。山根有三はこのような花を「利休の茶室花の精神からは大分遠いもの」であり、「深い思想や正しい技巧があつたとは思われない」と評している。この評価の是非は措くとしても、彼らの花が利休のそれとは異なる性質を持つものであつたことは確かであろう。このような「茶花」の多様性についても考慮する必要があるが、本報告ではこの部分についての議論は割愛する。

この「茶花」に関して、『立華訓蒙図彙』（元禄八年序）では「抛入」と題した章に、織部が風呂の茶に生けた花、あるいは宗旦が草庵に生けたという花をはじめとして、三斎、遠州、石州らの花を掲載している。また『華道全書』（享保二年刊行）には、「抛入は茶の湯の花に用ひ来り」と言い、「挿花稽古百首」（安永四年奥書）には「或茶を好む人挿花（いけばな）は重しと云。答へて茶室の投入よりくらぶれば重かるべし」と言う。このように江戸時代前中期において、多くの花道家が「茶花」を「抛入花」と捉えていた。一方、茶人の方では、『当流茶之湯流伝集』（元禄七年）に「世になげ入のうち込花のなどと云は花の道を不知人の云なり……立花師の方よりなげ入のうちこみのと云。本生花は立花師のしる所にあらず。……なげ入のうち込のと云言葉は茶の湯には無事也」と言い、『三斎流生花』（享保一五年）には、「生花を投入打込と言は立花師の方より嘲呼たる詞にて造化自然の妙所上代生活の術中なか立花師の知る所にあらず。然るを書院に有る大なるを大生花中生花と云数寄屋圍に有茶花を投入といふなど、自ら我家をさみするににて笑ふべきに堪たり。只生花と可称也」と言う。花道家の方が「茶花」を「なげいれ（あるいは打ち込み）」と規定しその花を軽視していた事に対し、茶人は「茶花」を「抛入花」とするのは花道家の無知の為すところであり、「茶花」は「生花」であると主張する。ここで「抛入花」は無造作な軽い花として解されており、「生花」はそのような負の評価を伴わない、精神的な深みを持つ軽い花として用いられている。

第三章 「生花」の位置

室町末期には「なげ入花」、「茶花」、「生花」は混然としていたが、近世前期、「茶花」の評価を巡ってそれぞれの特質が浮き彫りにされてゆく。自然志向の「なげいれ」は無造作な花と最小限の格を整える花とを包含し、後者は近世後期において天地人の格を持つ「生花」へと繋がる。一方「茶花」は軽さと深さを併せ持つ「生花」として自己を規定する。すなわちここでは「生花」という言葉がキーワードになっており、そしてこの「生花」は、花人茶人双方にとって理想でありつつもその指す所が異なっている。換言すれば、「生花」という理念の奪い合いが行われた。以下では、立花師、生花師および茶人という三つの立場から各々の意図と主張を整理する。

まず立花師の立場で言えば、「抛入花」「生花」を「立花」の枠組みの中に取り込みたいという意

図があつた。既に室町期においても「なげいれ」を「立花」の草体として位置付けているが、「茶花」が隆盛するに従いこの志向は加速する。「抛入花」を「立花を略したる物」と規定した『抛入花伝書』も匿名で著されたものであるが、筆者は池坊の高弟十一屋太右衛門であつた。また同じく池坊系の『生花正意四季之友』は、「書院かかり」と「囲かかり」の区別をつけ書院の花も茶室の花も「生花」に統一しつつ、「惣じて立花も生花もともに基本一致にして更に別物にあらず」とする。同書はまた「別に生花の家といふことをきかず」と言い「池坊は茶道にもすぐれ」と言うように、あらゆる花の根本に池坊を据える事を目指している。立花師は、室町期の茶の湯の隆盛から生まれた「茶花」を「立花」の伝統から逸脱させない事に力を注いでおり、その為の道具として「抛入花」、「生花」を概念化し利用したと言える。

次に生花師であるが、彼らはまず自らの独自性を強調する為に「立花」との距離を取る必要があつた。そのために最も重要なことは「抛入花」、「生花」が「立花」とは別系統の、あるいは「立花」よりも正統性を持つ花であると位置付ける事であつた。先の『抛入岸之波』の主張や『生花極秘』(天明八年奥書)に「生花といふものは立花よりはる穹隆して花の根元なりといふ」とあるのはその為である。一方で、彼らは自らの花の出自を「茶花」に多く依つており、著名な茶人の名を最大限に利用した。例えば一八世紀以降、千家流、織部流、遠州流などというように茶人の名を冠した流派が林立している。また一方で彼らは、その権威を利用しつつも最終的には茶人とも距離を取る必要があつた。源氏流などはその淵源を茶人を超え足利義政まで遡つて設定するとともに、「源氏の花論には書院床餅りを専として茶席の花は其次とす。今世上の抛入茶花とはいけかた趣意も異なり」『生花枝折抄』(安永二年刊行)と言ひ、書院の花として「生花」の独自性を主張する。そしてこの源氏流が、所謂今日に言う天地人の役枝を持つ「生花(せいか)」成立の端緒を開くこととなる⁹⁾。したがつて、彼ら生花師は自らの「生花」の独自性を強調するため、「茶花」と「抛入花」を「即興の翫物」として同一視する傾向があつた。

一方、茶人が「茶花」を「生花」と位置付けたのは既に永禄天正の頃である。池坊専栄が永禄一〇年の『花伝抄』において「生花」の条目を立てたのも、この茶の湯の花の隆盛を受けての事であると考えられる。この「生花」の呼称に「立花」との対比があつたことは言うまでもない。しかし近世前中期において、立花師は「立花」の一部たる「生花」として「茶花」の取り込みを図り、生花師は自らの「生花」を守るために「茶花」を「抛入花」と規定し続ける。そのため茶人は「生花」たる「茶花」の正統性を改めて主張する必要が生じ、それは「生花」の起源が茶道であるという主張につながつていく。例えば『三斎流生花』では「夫花は醍醐帝の御宇より初まり茶家に伝う。依て茶花一伝たり」と言ひ、茶と花の伝統は足利義政から珠光利休を経て細川三斎に伝わり「夫より生花の法備り式定ぬ」とし、その後一尾微斎を経て佐渡休斎が花と茶の伝を分けて二伝となつたとする。茶人においては負の側面を持つ限りにおいて「抛入花」の呼称を否定しつつ、「茶花」の「生花」としての正統性を確保する方向で花の思想が深められてゆく。

おわりに

花道史一般においては、「なげ入花」が「茶花」を介して「抛入花」になつたという理解が主流である。たとえば『いけばな辞典』の「投入」の項目には、「投入が、草庵風の茶の湯にふさわしい花としてとり入れられ、茶花とよばれた」とし、その後元禄頃を境に「茶の湯からはなれ、投入花として自立するにいたつた」と言う。勿論総体的に見て誤りではないのだが、些か「単線的」に過ぎる理解であろう。

この反省に立つて本研究では、動的かつ複眼的に「抛入花」、「茶花」、「および「生花」の関係を捉える事を試みた。その概要は既述の通りであるが、不明瞭・不十分な点も多く残されている。これらの点については今後の課題としたい。

⁹⁾ 今日この三才の格を持つ様式である「生花」は「せいか」あるいは「しょうか」と読まれるのが普通であるが、「活花」、「挿花」といった語からも分かるように当時多くの場合「いけばな」と読まれていた。